

## 单士釐一家と下田歌子との交流

稲森, 雅子  
九州大学人文科学研究院 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/6796457>

---

出版情報 : 中国文学論集. 51, pp.95-112, 2022-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



# 单士釐一家と下田歌子との交流

稲 森 雅 子

一九九八（光緒二十三年）、湖江総督の張之洞の著作『勸学篇』に触発され、日本陸軍やその他の教育機関への清国留学生派遣が本格化した。これを機に、錢恂（一八五三〜一九二七）<sup>1</sup>が留学生監督に任じられ、妻の单士釐（一八五八〜一九四五）<sup>2</sup>は、翌年初めて日本を訪れた。さらにその翌春、子の錢稻孫（一八八七〜一九六六）<sup>3</sup>らも来日し、日本で学び始めた。单士釐は、さっそく日本語を習得して翻訳にも挑戦し、一方で複数の日本人女性とも交流して詩文を綴った。一九〇三年春、单士釐は夫とともにロシア、欧州へ赴く。中国人女性初の海外旅行記『癸卯旅行記』はこのときの記録である。单士釐は、その後も一九〇六年秋の離任まで、夫とともに本国と日本の間を往復した。

单士釐と下田歌子（一八五四〜一九三六）との縁は、单士釐の子女の実践女学校入学にはじまる。二人の関係は、これまで、主に教育学や女性学の視点から論じられてきた。本稿では、单士釐の詩及び実践女子大学図書館所蔵の書簡数点より、さらにこまやかに交流の軌跡を辿ってみたい。

## 一 下田歌子と清国女子留学生受入について（概観）

はじめに、先行研究<sup>4</sup>をもとに下田歌子及び実践女学校と清国女子留学生との関係について概観してみよう。

下田歌子（原名≡平尾鉞）は、美濃国岩村藩（岐阜県恵那市岩村町）の勤皇の藩士、平尾録蔵の長女として生ま

单士釐一家と下田歌子との交流

れた。母方の祖父東条琴台（一七九五〜一八七八）も、当時活動的な儒学者として知られた。<sup>⑤</sup>歌子は、幼少より漢学に親しみ、十八歳より宮中に出仕して皇后に近仕した。一八七九年、下田猛雄（一八四八〜八四）との結婚に伴い辞職したが、一八八二年に桃天学校を開き、夫を亡くした翌一八八五年、華族女学校の開校に伴い同校教授となる。一八九三年九月より皇女教育視察のため欧州へ約二年間留学し、西洋と東洋の女性観の違いに衝撃を受けて帰国した。一八九八年に女子教育の振興を目指し、帝国婦人会と実践女学校を創設する。間もなく、教職員らとともに、早稲田大学留學生の戡翼輩（一八七八〜一九〇八）より中国語を学び始めたが、下田歌子はとりわけ習得が速かったという。受講者の一人、辺見勇彦は上海に渡り、一九〇一年に戡翼輩らとともに作新社を興して、雑誌『大陸』の発行や下田歌子著作などの翻訳出版を始めた。<sup>⑥⑦</sup>

一九〇一年の秋、開校間もない実践女学校に一人の中国人女性が入学する。『下田歌子先生伝』は、次のように記す。

明治三十四年、辛丑の歳、一人の清國女學生が、ゆくりなくも麴町元園町の校舎に入學した。彼女は最初その父兄に伴はれて日本に來り、次いで、特に校長下田歌子先生の名を慕ひ、日本での完全な女子教育を受けたために、意を決して身を實踐學園に寄せたのであつたが、すでに日本語も相當に話せるし、技藝の教授を受ける點に於いては、格別他の生徒と變はるところがなかつたのである。（二九三頁）

実名はないが、この女學生は、単士釐の長男錢稻孫の妻包豊保（一八八三年生）とされている。<sup>⑧</sup>これ以降、単士釐と下田歌子の交流も始まったとみられる。実践女学校は、翌年七月、さらに清國人女子四名を受け入れて特設課程「清国女子速成科」を設けた。<sup>⑨</sup>包豊保は、一九〇四年七月、陳彦安<sup>⑩</sup>とともに第一期生として卒業した。このときの卒業式は、楊樞清国公使や東久世通禧樞密院副議長はじめ多くの來賓が招かれて盛大に催されたという。<sup>⑪</sup>一九〇五年に実践女学校は「清国留學生部」を設置、多くの中国人女子留學生が学んだ（一九二二年）。この一群の中に、秋瑾が含まれることは広く知られている。

## 二 先行研究による判明事項と問題点

単士釐と下田歌子の関係において、これまで最も注目されてきたのは、下田歌子『新撰家政学』（金港堂書籍、一九〇〇年）を単士釐が漢訳し、出版したことであろう。先行研究によると、錢単士釐訳『家政学』は、中国国家図書館に所蔵されている。出版社及び出版年の記載はないが、錢恂による一九〇二（光緒二十八）年五月の序文があるとする。このほか、復旦大学図書館にも同書二組（筆者未見）があるが、うち一組は、一九〇三年刊とされる。なお、本書は、管見の限り日本国内に所蔵されていない。

次に注目されてきたのが、単士釐の詩「丙午秋留別日本下田歌子」<sup>13</sup>である。これは、単士釐が一九〇六年の秋、日本を離れるにあたり下田歌子へ贈った七言律詩である。先行研究では、面識を得た時期や二人の関係を推認する材料として、詩の原文のみ、あるいは意識が紹介されてきた。

さらに、『癸卯旅行記』（東京・同文印刷舎、一九〇四年）の一部分は、単士釐が下田歌子の教育方針に賛同していた証左としてよく引用される。単士釐、錢恂夫妻は、包豊保を関西まで同伴して各地を見聞し、包豊保が単身東京へ戻る前日、母単士釐は、実践女学校で学ぶ姿勢について論じた。さらに、同校幹事の時任竹子に包豊保を新橋駅まで迎えに来るよう依頼していたことも記されている（旧暦二月二十二、二十三日）<sup>14</sup>。

昨年、董秋艷氏は教育史の立場から「清末中国における日本の女子教育情報——下田歌子の『新選家政学』（一九〇〇年）の中国語翻訳書に着目して——」（『教育基礎学研究』第一八巻、九州大学教育基礎学研究会、二〇二一年、三七〜五一頁。以下「董氏論文」と略称）において、下田歌子が単士釐及び張之洞とみられる人物に宛てた書簡の原稿（清国知友宛書簡）所収、実践女子大学図書館所蔵）を取り上げ、単士釐と下田歌子との交流について紹介している。これは、両者の関係を知る重要な指摘である。そこで筆者もまた、同館よりこれらの複写を取寄せ、二人の交流を、以下つぶさに検証したのが本稿の主旨である。

三 单士釐「丙午秋留別日本下田歌子」

詩題が示すとおり、一九〇六年（＝丙午）秋に单士釐が日本を離れるにあたり、下田歌子へ贈った詩である。残念ながら、実践女子大学図書館に本詩に関する資料は残っていないようである。以下に全文を示す。

丙午秋留別日本下田歌子（丙午の秋 日本下田歌子に留別す）

六載交情幾溯洄 六載の交情 幾たびか溯洄すれば

一家幸福荷栽培 一家の幸福 栽培を荷はるるにあり

長子婦包豊子於實踐女學校畢業（長子の婦 包豊子 実践女学校に業を畢ふ）

扶持世教垂名作 扶持の世教は垂名の作なるも

傳播徽音愧譯才<sup>(16)</sup> 徽音を傳播するに訳才を愧ず

會譯君所著家政學付刊（曾て君の著す所の『家政学』を訳して刊に付す）

全國精神基女學 全國の精神 女学に基き

鄰邦風氣賴君開 隣邦の風氣 君に頼りて開けり

驪歌又唱陽關曲 驪歌して 又 陽関の曲を唱はば

海上三山首重迴 海上の三山 首重ねて迴らす

冒頭の「六載交情」は、包豊保が一九〇一年に実践女学校に入り、両者が知己を得たことを裏付けらるだろう。次いで、「包豊子」こと包豊保が実践女学校で学び終えたことへの感謝を述べる。第二聯は「扶持世教」すなわち『家政学』の訳書刊行について触れる。後世に名を残す作と讃え、自らの翻訳能力を愧じる。第三聯は下田歌子の女子教育事業への賛辞を記す。最終聯は日本を離れる情を詠む。最終句の「三山」は、『史記』秦始皇本紀に見える三神山（蓬萊、方丈、瀛洲）に拠り、ここでは日本を指すだろう。別れの歌（驪歌）として、有名な「陽関曲」こと王維

「送元二使安西（元二の安西に使いを送る）」詩を朗唱し、船上より何度も日本を振り返るさまを表現した。単士釐は、一家の受けた恩恵と交流の成果物たる翻訳書を織り込みつつ、下田歌子に対する感謝の念と惜別の情を伝えようとしたのであろう。この六年間、二人の間にはどのような交流があったのだろうか。以下、実践女子大学図書館所蔵資料をもとに、その軌跡を探ってみたい。

#### 四 実践女子大学図書館所蔵「清国知友宛書簡」

実践女子大学図書館所蔵「清国知友宛書簡」は、本文全五丁からなる手筆の草稿で、日付の記載はない。標題①「回李君宗棠」（一丁表）、②「回錢夫人」（二丁表）、③「再白」（二丁裏）、④「呈張君」（三丁表）、⑤「別啓」（四丁裏）、⑥「呈錢夫人」（五丁表）、⑦「回錢夫人」（五丁表、裏）の七点から成る。標題の宛先人は、李宗棠①、錢夫人②⑥⑦、張氏④の三名である。本稿では、先に董氏論文に紹介された②④⑦に加え、⑤⑥の計六書簡稿を対象とし、順に全文を示し、時期や宛先人等を検討する（句読点、字体等は原文に拠る。以下同）。

#### ②回錢夫人（錢夫人に回す）

再辱華牘。辞旨懇篤。感荷々々。令娘體軀頗健。強学不懈。近来尤見進步。欣慰何如。貴国一遊之件。妹平生尤所希望。但前月中。被命太子妃輔導之職。繁忙更加。今也乞休暇。多不過一月。以故不能悠悠遊觀、如素志。然北京。則必欲一往。爾時當携令娘去。張氏夫妻。別呈一書。幸煩轉達。又承。貴良人有辭職之意。想應事情有萬不得已。但為邦家。暫忍耐。待奏功。何如。他附後鴻。勿々不宜。

（再び華牘を辱くするに、辞旨 懇篤なり。感荷々々。令娘 体軀頗る健なり。強学懈らず、近来尤も進歩を見る。欣慰 何如。貴国一遊の件、妹の平生尤も希望する所なり。但だ前月中、太子妃輔導の職を命ぜられ、繁忙更に加はれり。今也た休暇を乞ふも、多くとも一月を過ぎず。故を以て悠々として遊觀する能はず。素志の如くんば、然れども北京には、則ち必ず一往せんと欲す。爾時 当に令娘を携へて去くべし。張氏夫妻、別に

一書を呈す。幸くは転達を煩はさん。又承るに、貴良人に辞職の意有りと。想ふに応に事情の方已むを得ざること有るべしと。但だ邦家の為、暫し忍耐し、奏功を待つは、何如。他は後鴻に付さん。勿々不宜)

董氏論文では、この書簡稿の時期を「一九〇三年の夏休み前」と推測する<sup>20)</sup>。しかし、『癸卯旅行記』によれば、単士釐は一九〇三年三月十五日に東京を発ち、五月二十六日にロシア帝国の首都サンクトペテルブルクへ到着している。下田歌子は、遠国ロシアにいる単士釐へ、わざわざ在清国の張氏宛て書簡の転送を依頼するだろうか。

書簡冒頭で「令嬢」包豊保の様子を報告したあと、「貴国一遊之件。妹平生尤所希望」と中国訪問の希望を記す。『下田歌子先生伝』は、卷末「年譜」一九〇二年七月の項に「渡支の計畫あり」とある。また、文中の「太子妃」は、節子大正天皇妃を指す。節子妃は、一九〇一年に十六歳の若さで迪宮裕仁親王（のちの昭和天皇）を出産、まもなく第二子を懐妊した。原武史『皇后考』（講談社、二〇一七年）は、当時節子妃は精神的不調が強まっていたとし、関係者資料をもとに「このとき、皇后美子の分身として動いたのが下田歌子であった。一九〇二年五月二十三日、下田は節子に会い……五月三十日、六月六日、六月十三日にも下田は節子に会っている」（同書一六四―一六五頁）と詳述した。この状況もまた、本書簡の内容と符合する。さらに、文末の一文より、単士釐が錢恂の辞意を下田歌子に伝えていたことがわかる。『癸卯旅行記』には「外子雅不欲再聞鄂事、去歲已堅辭絕（外子雅「決して」再び「二度と」鄂事〔湖北省の政治や軍事〕を聞く〔関与する〕を欲さず、去歲〔一九〇二年〕已に堅々〔堅く〕辭絶せり）」<sup>21)</sup>とあり、錢恂が張之洞幕下を辞したのは、一九〇二年と記す。

このように書簡の内容は、いずれも一九〇二年の出来事と一致する。錢恂は、同年五月中旬は東京、八月初めは上海に在り、十一月中旬に再来日しており、単士釐も同道したと思われる。以上のことから、本書簡は、一九〇二年六月前後、東京に居る単士釐宛てに書かれたと推定される。

### ③再白（再び白ぶ）

拙著家政学。既經高手翻譯。以煩之貴友。知己之感。實所叩謝。但是蕪稿無可觀。得不赧然乎。

年月日

(拙著家政学、既に高手の翻訳を経、以て之を貴友に頒つ。己を知るの感、実に叩謝する所なり。但だ是れ蕪稿の観るべきもの無く、赧然たらざるを得んや。年月日)

『家政学』翻訳完成と頒布への謝辞である。董氏論文では、これを④「呈張君」の付録とし、「作新社から出版された『新編家政学』を張(Ⅱ之洞、筆者注)に謹呈する目的もあつた」とするが、②文末に「他附後鴻」とあることから、③は②の追伸の可能性が高い。さらに、「年月日」は、③⑤の後方にのみある。よつて、②と③を単士釐宛一組、④と⑤を「張君」宛一組、と見るのがよいであろう。

次に、単士釐訳『家政学』の錢恂序の時期は、先述のとおり、ほぼ符合する。他方、作新社翻訳書の出版は一九〇二年十月十六日(旧曆<sup>23</sup>)で、上述の推測より四ヶ月遅い。以上二点より「高手」の翻訳者は単士釐となる。

また、一連の書簡稿で「貴」は相手への敬称として用いられており、頒つ「貴友」は単士釐の友人だろう。

#### ④呈張君(張君に呈す)

下田歌子再拜白。張君及夫人閣下。往年辱過訪。筆門生光輝。感々。近来錢氏女。來寓敝塾。因得晤錢夫人、仄聞貴夫人學問浩博、文思秀發。妹欽慕不能措。託錢氏。謹呈一書。文字拙陋。言不盡意。幸諒之。夫尊大人督台。賢名夙鳴于敝邦。督台銳意講日進之學。使貴弟學于敝邦。且其規畫學政。井整有法。文運隆々日上。是可賀也。頃又聞。貴国女生徒。游學於敝邦、及歐洲諸国。逐次加多。是尤可賀也。但此時。有不可不加意者。蓋少年學生。徒眩他邦之華。忘本国之實。則本末失序。主客易位。妹謂。東洋女德之美。冠絕宇内。古今史籍。所傳。班々可觀。然而風氣所鼓。未必無誤本末主客者。故妹常以為。今日任女子教育者。主東洋女德之美。加以西歐科學之智。彼此混和。長短相濟。得失互補。則文質彬彬。必有可觀。而任此責者。以有德望、有勢力者。為最宜。而首設家塾。開其端緒。次聘賢女師。以建女學。而定他日興高等女學之基礎。是即為今日之急務。夫貴国之富強與開明。關於亞細亞全局之興隆。故妹雖不肖。欲舉一身、竭之教育、以答國家興女學之盛意。獨奈才微而任重。公之。今

單士釐一家と下田歌子との交流

也監於華族女学。兼帶 皇太子妃、及内親王輔導之重任。私之。兼長於帝國婦人協會、及實踐女学。應酬紛忙。日不暇給。雖然。閣下既篤志於教育如彼。自今相繼。毅然執教壇牛耳。則妹幸有盛夏一月餘休暇。將欲赴貴國、隨閣下之後、吐露平生所志、并乞諸賢教。是所切望也。東洋各邦。今也屬小康。興學之舉。唯此時為爾。閣下必有所見。幸勿吝緒論。至懇々々。勿々布字。專此。并頌萬福。

(下田歌子再び拜して白す。張君及び夫人閣下、往年過訪を辱ふし、筆門 光輝を生ず。感々。近来錢氏の女、敝塾に來寓す。因りて錢夫人と晤ふを得。仄聞するに貴夫人の學問は浩博、文思秀發なり。妹欽慕して措く能はず。錢氏に託し、謹みて一書を呈す。文字拙陋、言 意を尽くさず。之を諒されんことを幸ふ。夫れ尊大人の督台、賢名は夙に敝邦に鳴す。督台 銳意日進の學を講じ、貴弟をして敝邦に學ばしむ。且つ其れ學政を規画すること、井整として法有り。文運隆々 日に上る。是れ賀すべき也。頃 又聞くならく、貴國の女生徒、敝邦、及び歐洲諸國に遊學すること、逐次加多なりと。是れ尤も賀すべき也。但だ此の時、意を加へざるべからざるは、蓋し少年學生なり。徒らに他邦の華に眩み、本國の実を忘るれば、則ち本末失序、主客易位なり。妹謂へらく、東洋女徳の美、宇内に冠絶たり。古今の史籍の伝ふる所、班々として觀るべし。然るに風氣の鼓す所、未だ必ず本末主客を誤る者無きにしもあらず。故に妹常に以為らく、今日女子教育を任ずる者、東洋女徳の美を主とし、加ふるに西歐科學の智を以てす。彼れ此れ混和し、長短相濟し、得失互ひに補へば、則ち文質彬彬として、必ず觀る可きもの有り。而して此の責に任ずる者、徳望有り、勢力有る者を以て、最も宜しと為す。而して首めに家塾を設け、其の端緒を開き、次いで賢なる女師を聘し、以て女學を建つ。而して他日を定め高等女學の基礎を興すは、是れ即ち今日の急務なり。夫れ貴國の富強と開明、亜細亞全局の興隆に關す。故に妹 不肖と雖も、一身を挙げ、之を教育に竭くし、以て國家の女學を興さんの盛意に答へんと欲す。才微にして任重きを独奈んせん。之を公するに、今也た華族女學を監し、兼ねて皇太子妃、及び内親王輔導の重任を帶ぶ。之を私するに、帝國婦人協會及び實踐女學に兼ねて長たり。応酬紛忙、日に暇給あらず。然りと雖も、閣下既に志を教育に篤くすること彼の如し。今自り相繼ぎ、毅然として教壇の牛耳を執る。則ち妹幸ひ盛夏に一月余の休暇有り、將に貴國に赴き、閣下の後に隨ひ、平生志す所を吐露し、並びに諸賢教を乞はんと欲す。

是れ切望する所也。東洋の各邦、今也た小康に属す。興学の拳、唯だ此の時に爾たり。閣下必ず所見有り、緒論を吝す勿からんを幸ふ。至懇々々。勿々布字。此を専にし、並びに万福を頌す。

本書簡は、かつて小野和子「近代日本と中国（三四）——下田歌子と服部宇之吉——」（『朝日ジャーナル』十四卷四〇号、朝日新聞社、一九七二年十月、三一―三九頁）に「張氏書簡」として一部分紹介された。下田歌子の熱意が感じられる長文である。全体の趣旨は、董氏論文のとおり、張之洞の教育政策を賛え、女子教育の重要性を共有し、海を渡り張之洞と面会を願うものである。但し、翻訳書贈呈に関する記述は見当たらない。

さて、宛先人は、本当に張之洞なのか。<sup>25</sup>冒頭に、先年張氏夫妻が来訪したことへの謝辞があるが、張之洞は日本を訪問していない。他方、長男の張権（一八六二―一九三〇、字君立）は、一九〇〇年五―八月に来日しており、下田歌子を訪ねることは可能である。次いで、「貴夫人」とあるが、このとき張之洞に正妻はいない。三度妻を娶ったが、相次いで先立たれ、以後は正妻を迎えなかつたという。加えて、「尊大人」は、相手の父に対する敬称である。その後記す業績も張之洞のものである。従って、④宛先人は、張之洞の長男張権と考えられる。

#### ⑤別啓（別に啓す）

銭娘敏慧。立志極確。学科日進。尤可喜。妹有深望於他日也。并報。

年月日

（銭娘敏慧にして、立志極めて確なり。学科日進するは、尤も喜ぶ可し。妹 他日に深望有る也。並報す。年月日）

③冒頭に触れた「銭娘」について、学習の様子を「並報」する。従って、先述のとおり、④の追伸と思われる。文面より下田歌子が包豊保を評価し期待していた様子が窺える。以上、②⑤は、いずれも一九〇二年六月頃に書かれ、一括して単士釐に送られたものと推測される。

単士釐一家と下田歌子との交流

以下の二書は、単独で出された短信稿とみられ、同一葉に連続して並ぶ。よって、時間順の配列と思われる。

⑥呈錢夫人（錢夫人に呈す）

前日接芳翰。承貴家家族中。有罹疫遠逝者。痛悼何堪。但願枉節悲哀。不致成疾。懇祈々々。謹茲奉唁。

（前日、芳翰に接す。承るに貴家家族の中に、疫に罹り遠逝せる者有りと。痛悼 何ぞ堪へんや。但だ節を枉げ 悲哀もて、疾を成すに致らざらんを願ふ。懇祈々々。謹みて茲に奉唁す。）

丁寧な追悼の言葉で綴られた弔文である。管見の限り、単士釐と下田歌子との交際期間に亡くなった単士釐の親族は、錢恂の義母にして錢玄同（一八八七〜一九三九）の母周氏である。『錢玄同日記』（北京大学出版社、二〇一四年）には、一九〇二年「七月初十日、生母周患時症、急痢竟日、亥時卒……九月兄來湖掃墓（旧曆七月十日（八月十三日）生母周氏が伝染病にかかり、急な下痢が終日続き、亥の刻〔午後九〜十一時〕に亡くなった……旧曆九月、兄が墓参に来た」と記し（四頁）、伝染病で急逝する点が、書簡と一致している。ゆえに、本書簡稿は、周氏の逝去から間もない時期、すなわち一九〇二年八月下旬〜九月あたりに書かれたものと思われる。

⑦回錢夫人（錢夫人に回す）

前書奉囑。譯書局贊助之件。既辱被諾。感荷々々。妹親族中亦深感高誼也。更願將來加庇護。又承。尊臺欲來遊敝邦。渡航期在十月下澣。妹聞之一日三秋。瞻望無已。令嬢康健依舊。學業益進。幸勿勞慮。他付拜晤。不宜。

（前書に囑し奉る。訳書局贊助の件、既に諾せらるるを辱ふす。感荷々々。妹の親族中も亦た高誼に深感する也。更に將來庇護を加へられんことを願ふ。又承るに、尊台敝邦に來遊せんと欲し、渡航の期は十月下澣に在ると。妹之を聞きて一日三秋、瞻望已むこと無し。令嬢、康健なること依旧のごとく、學業益進す。勞慮勿からんを幸ふ。他は拜晤に付さん。不宜。）

冒頭の「訳書局」は、董氏論文に拠れば、先述の作新社を指す。下田歌子は、贊助承諾への謝意を示した。錢恂は、一九〇二年春、同じく戢翼輩が関与する訳書彙編社にも銀六十元を寄付していた。<sup>(27)</sup>

後段は、単士釐が旧暦「十月下澣」に來日するとの報への返答である。下田歌子は「一日三秋、瞻望無已」と述べ、再会を心待ちにしている様子が窺える。上述のように、錢恂は一九〇二年十一月十五日横浜に到着しており、単士釐も同道していたと思われる。よつて、本書簡稿は、同年九月十月頃に書かれたと推測される。

以上、実践女子大学図書館所蔵「清国知友宛書簡」より六点を検討した。これらは、一九〇二年六月頃から約半年の間に書かれた草稿と思われる。文面からは、両者が頻繁に連絡を取り合い、単士釐の親族について話題にするほど親しい間柄であった様子が見て取れる。

## 五 実践女子大学図書館所蔵「錢恂書簡」

このほか、実践女子大学図書館には、錢恂が一九〇三年に下田歌子へ送った書簡一通も蔵されていることが判明した。本文は便箋（二十四行、四周双辺。版心下部に「錢恂在日本國所譯録」とあり）二枚に力強く整った楷書体で綴られており、封筒の裏書きに「牛込矢來町 錢恂」と記す。以下に本文を記す（読点は原文に拠る）。

拜啓陳者、久佩 淑德令譽、筆墨難盡、昨年以來、又以豐子孃蒙教育之惠、既感且幸、時々欲有所陳述、然恂不通貴邦語、所欲言者、又不能使他人傳譯、是以罕親警效、旬日以降、時有露西亞之遠行、且歸期遲滯、有不能不奉告者、乞鑒覽、豐子孃在帝國婦人協會、一今年矣、質性愚、不能有所進益、然愚夫婦期望之心、較他人為切、不如其他之中國婦人一度游貴國、稍々學語言、即可翹異也、寒家三世以教育為業、實非真正教育之道、不過用以謀生而已、今雖稍明教育之理、然中國教育未興、不能驟讀、然吾輩仍謀生而已、欲謀生必有謀生之術、卻意欲使豐子孃稍々沾貴國餘澤、以為謀生之術、而又欲為期不出三二年、此期限中、必能通一二之實學、如算術一門恐非豐子所長、其他又不盡中國現今之用、意止有英語專修、尚可適用、或再增一二實用之技、乃為有効、竊見協會中、於培

養貴國女徳女學、誠為周備、然於中國學生、且學生中之豐子嬢稍覺遲緩、豐子嬢全々恃大力栽培、不獨豐子幸、亦不獨寒家幸、實中國之幸、所以必堅求特別計畫、或如何專脩教授、或如何改入他校、皆請先生一人代完、俾此二三年或至三二年之内成一可以適用之材、則感激無已、總之必使豐子一人、可以自出典所學、以自立謀生、與他學生不同、則非先生之力不可、願期不遠、何日可以面賜意、為敬聽復音、不勝盼系之至、此仗先生年來之深愛、所以盡吐肺腑、度必蒙鑒諒也、臨緘不勝惶迫之至、敬候 起居萬福

二月五日

錢鈞

下田歌子様侍史

(拜啓 陳者、久佩す。淑徳の令誉、筆墨に尽くし難し。昨年以來、又豐子嬢の教育の恵を蒙るを以て、既に感じ且つ幸なり。時々陳述せんと欲する所有り、然れども恟 貴邦語に通じず、白べんと欲する所の者、又他人をして伝訳せしむる能はず、是を以て罕かに親ら警款す。旬日以降、時に露西亜の遠行有り、且つ帰期遲滞し、奉告せざる能はざる者有り、鑑覽を乞ふ。豐子嬢 帝國婦人協會に在りて、一個年なり。質性愚にして、進益する所有る能はず。然れども愚夫婦 期望の心、他人に較べて切なり。其の他の中国婦人の一たび貴國に遊び、稍々語言を学び、即ち翹異たるべきに如かざる也。寒家三世教育を以て業と為す。実に真正教育の道に非ず、用ふるに謀生を以てするに過ぎざるのみ。今稍や教育の理に明るしと雖も、然れども中国教育未だ興らず、驟読する能はず。然して吾が輩仍ほ謀生するのみ。謀生せんと欲すれば必ず謀生の術有り。却つて意ふに豐子嬢をして稍々貴國の余沢に沾し、以て謀生の術を為さしめんと欲す。而して又期と為すに三三年を出でざらんと欲し、此の期限内、必ず能く一二の実学に通じんと。算術一門の如きは恐らく豐子の長ずる所に非ず。其の他も又 中国現今の用を尽くさず。意ふに止だ英語專修の有るは、尚ほ用に適ふべしと。或ひは再び一二実用の技を増せば、乃ち有効為り。協會中を窺見するに、貴國の女徳女學を培養するに於けるや、誠に周備を為す。然れども中国の學生に於けるや、且らく學生の中の豐子嬢 稍や遲緩なるを覺ゆ。豐子嬢 全々として大力なる栽培を恃むは、独り豐子の幸ならず、亦た独り寒家の幸ならず、實に中国の幸なり。必ず堅く求むる所以なり。計畫を特別にし、或ひは專脩教授するは如何、或ひは改めて他校に入るは如何。皆先生一人に代完せら

れんことを請ふ。俾くも此れ二個年或ひは三個年に至るの内 一に以て適用の材と成るべくんば、則ち感激已む無し。之を総ぶるに必ず豊子一人をして、以て出典所學より、以て自立謀生すべからしむるは、他の學生と同じからざれば、則ち先生の力 可ならざるに非ず。願はくは遠からざるを期し、何れの日か 以て面して意を賜ひ、敬聴を為す可きを。復音あらば、盼系の至りに勝へず。此れ 先生年来の深愛に仗り、尽く肺腑を吐す所以なり。必ず鑑諒を蒙らんを度るなり。緘に臨みて惶迫の至りに勝へず。敬候 起居万福 錢恂 二月五日 下田歌子様侍史)

錢恂は、これまで包豊保が受けた教育に対し感謝を述べたあと、錢恂、単士釐夫妻が近日中にロシアへ向け出発すること、留守中の包豊保の教育を下田歌子に全面的に託したいこと、その教育期間は二三年、「謀生」すなわち生計を立てるのに必要な実用的學問がふさわしいこと、出発前に面会したいことなどを述べている。夫妻が東京を発つたのは、一九〇三年三月十五日(旧曆二月十七日)<sup>(20)</sup>で、書簡末の日付「二月五日」とも整合性がとれる。先述のとおり、夫妻は包豊保を東京から関西まで同道し、実践女学校で学ぶ姿勢を論したうえで東京に戻した。単士釐がこのことを『癸卯旅行記』に記したのは、下田歌子へ報告する意図があつたのかもしれない。<sup>(30)</sup>

## 六 実践女子大学図書館所蔵「張之洞書蹟」

さて、下田歌子の書簡とその熱意は「張氏」のもとに届いたのだろうか。その可能性を窺わせる資料、実践女子大学図書館所蔵「張之洞書蹟」がある。縦一五七・五センチメートル、横四八・五センチメートル(紙幅は、縦一二八・〇センチメートル、横三一・九センチメートル)の扁額で、贈呈及び額装の時期は不明である。<sup>(31)</sup>

「化行俗美賢才衆多(化行はれ俗は美にして、賢才衆多なり)」と右から左へ堂々とした筆致で大書され、左端に「張之洞」の署名、落款「無競居士(張之洞の号)」がある。この八字は、朱熹『毛詩集伝』国風(周南)の「兔置」にある。文王の徳化によって人民の生活が安定し、市井に数多の賢才が育つことを言う。実践女学校の前身、桃夭

女塾の出典「桃夭」は、「兎置」の直前にある。明治の女子教育に尽力した下田歌子にとってまことに相応しい辞句と言えよう。

### おわりに

以上、単士釐一家と下田歌子の交流について、単士釐詩及び実践女子大学図書館所蔵資料をもとに考察した。両者の交流は、一九〇一年に単士釐の長男の妻包豊保が実践女学校に入学したことを契機とし、一九〇六年秋に単士釐が日本を離れるまで続いた。下田歌子の書簡稿は、一九〇二年六月十一月頃のものと同推測され、頻繁に書簡を往復していた様子が窺える。夫銭恂も、翌春下田歌子へ書簡を送っていた。また、下田歌子は、張之洞の長男張権宛の書簡を、単士釐に託した。張之洞から下田歌子へ扁額が贈られた背景にはこのような経緯があったと考えられる。漢学者の家庭に育ち明治期の女子教育を牽引した下田歌子と、当代きつての才媛にして清国留学生監督夫人の単士釐。素養や価値観、年齢の近い両者は、短期間ではあるが、相互に敬意を持ちつつ親しく交際した。下田歌子が清国女子留学生受け入れを決意した要因の一端は、単士釐との邂逅にあったのかもしれない。

### 注

- (1) 銭恂は、浙江省湖州府歸安県の人。幼名は学嘉。号は、颯歩主人、受茲堂主人、積颯歩齋など。一八八七（光緒十三年）、薛福成の下で天一閣樓蔵書目錄編纂に携わり、欧州各地の公使館に勤務。帰国後は、張之洞（一八三七〜一九〇八）幕下に移り、一八九八年に留学生監督として初来日、たびたび日中間を往復、ロシアへ長期出張した。一九〇七年オランダ、翌年イタリヤ大使（出仕大臣、一九〇九年離任）。著書に『重刊唐韻攷』、『壬子文瀾閣所存書目』、『二二五疏』など。その経歴は、高木理久夫編、呉格訂「銭恂年譜（増補改訂版）」（『早稲田大学図書館紀要』第六十号、二〇一三年、一〇八〜一九五頁）に詳しい。本稿は、話題が清、日本、西欧の複数国にわたることから基本的

に西暦を用い、適宜元号を付す。

- (2) 単士釐は、浙江省蕭山の人。字は蕊珠、号は受茲。父の恩溥(字吉甫)は一八六二(咸豊十二)年の挙人、嘉興県の教諭。一八八四年、錢恂の後妻となる。夫の日本赴任以降の約十年間、日本や欧州各地に赴いた。詩文に長じ、『受茲室詩稿』・『癸卯旅行記』・『清閨秀正始再統集』・『清閨秀藝文略』のほか、下田歌子『家政学』・永江正直『女子教育論』の漢訳もある。単士釐の文学活動に関する先行研究として、蕭燕婉「単士釐と日本——『受茲室詩稿』と『癸卯旅行記』をめぐって」(『九州中国学会報』第四十五号、二〇〇七年、九二〜一〇六頁)・「単士釐とロシア——一九〇四年の『癸卯旅行記』を中心に——」(『中国文学論集』第四十号、二〇一一年、一一九〜一三二頁)、劉又瑄「一位近代女性啓蒙者的身影——単士釐(一八五八——一九四五)作品研究——」(花木蘭文化出版社、二〇一一年)、劉甜甜「単士釐の文學創作與文學活動」(暨南大学碩士學位論文、二〇一九年、以下「劉氏論文」と略称)などがある。拙稿「単士釐が来日初期に見た風景——『受茲室詩稿』を手がかりに」(『文学研究』第一一八輯、九州大学大学院人文科学研究院、二〇二一年三月、一〜三八頁)、「単士釐の出逢った日仏の女性たち」(『中国文学論集』第五十号、二〇二一年、二二七〜二四四頁)ほか参照。
- (3) 長男の錢稻孫は、錢恂と単士釐の長男。父に随い日本へ留学、慶應幼稚舎などで学び、欧州へも随行。中華民国教育勤務を経て、清華大学教授となり、日本人留学生の目加田誠博士らを自邸に寄寓させた。戦後、漢奸として有罪となる。万葉集や志賀直哉作品など多くの日本文学を翻訳した。
- (4) 女性学、教育学方面的の研究には、谷川栄子『癸卯旅行記』に見られる錢単士釐の女性観(『国際関係研究』第二二卷第四号、日本大学国際関係学部国際関係研究所、二〇〇二年、二七一〜二九〇頁)、黄湘金「從『江湖之遠』到『廟堂之高』——下田歌子『家政学』在中國——」(『山西師大學報(社會科學版)』二〇〇七年第五期、山西師範大学、八八〜九二頁)、韓韓「清末における下田歌子著『新選家政学』の翻訳・出版について」(『言葉と文化』第一五号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻、二〇一四年、一一〜二九頁)、孫長亮「清末期中国における日本女子教育の受容——単士釐、嚴修、張謇の日本視察に着目して——」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第四六号、二〇一八年、二六一〜二八二頁)などがある。

- (5) 東条琴台は、江戸生まれ。師である大田錦城の高弟平尾他山の婿養子となるも、思想の不一致から江戸へ出奔、離縁して復姓した。著書に『先哲叢談』など。このうち『伊豆七島凶考』が出版禁止となり、明治維新まで越後高田藩に幽閉された。維新後は明治政府に出仕した。
- (6) 『下田歌子先生伝』（故下田校長先生伝記編纂所、一九四三年）四二六～四二七・七五六頁、『実践女子学園八十年史』（実践女子学園、一九八一年）九九頁参照。
- (7) 前掲『下田歌子先生伝』四二六～四二九頁、広井多鶴子編著『下田歌子と近代日本——良妻賢母論と女子教育の創出——一八五四——一九三六』（勁草書房、二〇〇二年）三三七頁参照。
- (8) 石井洋子「辛亥革命期の留日女子学生」（『史論』第三六集、東京女子大学読史会、一九八三年）三二頁、周一川「中国女性性の日本留学史研究」（『国書刊行会、二〇〇〇年）五六頁、前掲拙稿「単士釐が来日初期に見た風景」二六～二七頁参照。
- (9) 前掲『下田歌子と近代日本——良妻賢母論と女子教育の創出——一八五四——一九三六』三三八頁参照。
- (10) 陳彦安は、章宗祥（一八七九～一九六二）の妻。一九一六年に公使夫人として下田歌子を再訪した。『下田歌子先生伝』（故下田校長先生伝記編纂所、一九四三年）巻頭口絵一七頁参照。章宗祥は、これより先に日本へ留学し、第一高等学校、東京帝国大学を卒業、のちに袁世凱政権の大理院院長や司法総長、段祺瑞内閣の司法総長兼農商総長を歴任した。
- (11) 前掲『下田歌子先生伝』三九八～四〇一頁、前掲『実践女子学園八十年史』一〇〇～一〇一頁参照。
- (12) 復旦大学図書館公式ウェブサイトによる。（日本）下田歌子著（清）錢單士譯述『家政學』二巻、一函二冊、鉛印本。索書号Ⅱ八六〇〇〇九（一九〇三年刊）、八六〇〇一（一九〇二年刊）。URL=<http://www.library.fudan.edu.cn/>、最終確認日Ⅱ二〇二二年七月十五日。後述のとおり、復旦大学図書館は、単士釐詩集（手稿）二組も蔵する。
- (13) 単士釐の詩作集として、①羅守異所蔵『受茲室詩稿』三巻（陳鴻祥校点、湖南文藝出版社、一九八六年。以下「湖南文藝本」と略称）、②復旦大学図書館所蔵『受茲室詩鈔』、③復旦大学図書館所蔵『受茲室学吟稿』、④遼寧省図書館所蔵『受茲室詩鈔』（李雷輯校『清代閩閩詩集萃編』第九冊、中華書局、二〇一五年、五三〇五～六五頁、後半部分は

①の転載。以下「中華書局本」と略称)の四種。このほか、前掲劉氏論文の附録三に「陳鴻祥『受茲室詩稿』未收詩作」がある。本稿は、④中華書局本を底本とする。

- (14) 点校本に楊賢校点、湖南文藝出版社走向世界叢書、一九八一年刊(以下『癸卯旅行記』と略称)など。国内では、鈴木智夫訳註『癸卯旅行記訳註——錢稻孫の母の見た世界——』(汲古書院、二〇一〇年。以下『癸卯旅行記訳註』と略称)がある。

- (15) 『癸卯旅行記』三二頁参照。

- (16) 中華書局本は「徵」と作るが、湖南文藝本に従い「徽」を採り「徽音(名声)」と解釈した。

- (17) 杜甫の詩「詠懷古跡五首 其五」初句に「諸葛大名垂宇宙」とある。

- (18) 『史記』卷六「秦始皇本紀」二十八年に「既已、齊人徐市等上書、言海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛洲、僊人居之。請得齋戒、與童男女求之。於是遣徐市發童男女數千人、入海求僊人。」とある。「徐市」は徐福。

- (19) 李宗棠(一八七〇〜一九二三)は、一九〇一〜〇八年の間に九度来日して、日本の学校教育事情を視察した。この間、下田歌子としばしば面会し、実践女学校と女子工芸学校を視察し、織物などを贈った。書簡はこの贈答に対する謝礼。巻頭にあることから、もつとも早期に書かれたと思われる。鄭素燕「李宗棠對日本國民性的認知述論」(『安慶師範大學學報(社會科學版)』二〇二二年第六期、安慶師範大學、二五〜二九頁)ほか参照。当該書簡は、単士釐一家と直接関係しないと思われることから、本稿では検討しない。

- (20) 董氏論文四二頁参照。

- (21) 『癸卯旅行記』三月四日(陽曆四月一日、三二頁)参照。訓読は『癸卯旅行記訳註』三六頁に拠る。

- (22) 「錢恂年譜(増補改訂版)」一五三〜一五四頁参照。

- (23) 董氏論文四三頁参照。

- (24) 前掲「清末における下田歌子著『新選家政学』の翻訳・出版について」一六頁参照。

- (25) 董氏論文四一〜四三頁、「第二節 湖広総督・張之洞への贈書」参照。

- (26) 『朝日新聞』一九〇〇年五月十八日朝刊二頁「清国人の来遊」、『読売新聞』同年八月二十八日朝刊二頁「張之洞令息

単士釐一家と下田歌子との交流

の帰国」、「張氏招待會」(『東亜同文会第九回報告』、東亜同文会、一九〇〇年七月、十一頁)、李廷江編『近衛篤磨と清末要人——近衛篤磨宛來簡集成——』(原書房、二〇〇四年)四一—四二頁ほか参照。張権の来日期間、しばしば張権に随行する錢恂の記録が見える。

(27) 「壬寅年本編贊助員芳名録」(『訳書彙編』第二年第一期、訳書彙編社、一九〇二年四月)参照。

(28) 『朝日新聞』一九〇二年十一月十七日朝刊二頁「湖北留學生の來着」に、「一昨日午後上海より帰港せし神戸丸にて清国湖北の留學生三十三名三品銜知府錢恂氏監督の下に來着したり」と記す。

(29) 前掲『癸卯旅行記』二三頁参照。

(30) この直後(一九〇三年四—七月)、包豊保は他の女子留學生とともに、下田歌子の意に叛き「拒俄運動」(ロシアの清国侵攻に抗議する學生運動)に参加した。前掲『中国人女性の日本留學史研究』六六—六八頁参照。

(31) 字句は、実践女子大学香雪記念資料館二〇〇六年度展覧會「下田歌子と中国——清国留學生部を中心に——出品目録——」参照(URL=[https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/exhibits/archive/h18/2006\\_1\\_2.html](https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/exhibits/archive/h18/2006_1_2.html))。資料番号＝十一、最終確認日＝二〇二二年七月十五日)。寸法は、二〇二二年二月に実践女子大学図書館よりご教示いただいた。

※本研究は、JSPS 科研費 JP20K12947 の助成を受けたものです。